

—師走（12月）のことば—



が ん そ い たか
『**純素** **画**か**ず** **意** **高**き**かな**

も たんせい つ に だ き
若し**丹**青**を**着**く**れば **二**に**墮**し**来**たる』

ちょうど二十年前のこの紙面でも、筆の進まぬ苦しまぎれにこんな空っぽの窓を作っていたことを思い出しました。その時にはこんなことを記していました。

“画家は何も描かれていない真っ白なキャンパスが最高の美と知りつつ、敢えてそれ以上の美を生み出すことに挑戦し、色をおいていきます。音楽家も静寂が最高の音楽と知りつつ音をのせてさらなる美を追求していくと云われます・・・”などと。

上に掲げた言葉（漢詩）はまさにこのことを表わしています。これは先月ご紹介した蘇東坡の「無一物中無尽蔵・・・」の前に置かれた句なのですが、“織り上がったばかりの何も描かれていない白布の見事さは最高であり、もしも赤や青の色をそこに置けばとらわれや迷いのもととなってしまうであろう”という意味で、そんな“無一物な心境”だからこそ、花も月も味わうことが出来るのだと。ですから、折角何も描かれていない今月の伝道板ですので、思う存分、心ゆくまで自由自在に描いてみましょう。私の心もあなたの心も、とてつもなくデッカイのですから…そして無尽蔵なのですから…

ところで、水をさすようで恐縮なのですが…

静寂が一番！なんてことも承知の上で、実は先日「鹿脅し（ししおどし）」を作ってみました。手水鉢にしたたる水を受けて、時折り「カッコーン」と鳴く、アレです。実にいい音です。「カッコーン」が静寂をさらに静寂たらしめると申しますか…実にイイのです。皆さまに聞かせて差し上げたい。いえ、静寂を味わって頂きたいと思うのです。

「禅僧こぼれ話」のつづき（白隠禅師）を掲載するお約束でしたが、急遽変更させていただきました。いまいちど『日本国憲法前文』を見直してみたかったです。

日本国憲法前文

日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたって自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないようにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであって、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基づくものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思う。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

われらは、いずれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであって、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従うことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立とうとする各国の責務であると信ずる。

日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓う。

このように、日本には「平和主義」「基本的人権の尊重」「国民主権の原理」の基本原則があったはずなのに・・・